

# 巻 頭 言

## Editorial

### ディケンズとアメリカ (の関係の一つのおもしろい例)

#### Dickens and America, or a Curious Instance of That Relationship

日本支部長 佐々木 徹

Toru SASAKI, President of the Japan Branch

『荒涼館』第25章、スナグズビー氏がなまじ妙な秘密に巻き込まれたばかりに疑い深い奥さんに睨まれ、さらにびびってしまうくだりにこんな文が出てくる。

To know that he is always keeping a secret from her, that he has under all circumstances to conceal and hold fast a tender double tooth, which her sharpness is ever ready to twist out of his head, gives Mr. Snagsby, in her dentistical presence, much of the air of a dog who has a reservation from his master and will look anywhere rather than meet his eye.

ここの *tender double tooth* から *dentistical presence* に移行する呼吸など、いかにもディケンズらしく、まことにすばらしい。それはそれとして、この *dentistical* はディケンズの造語だろうと思って *OED* を引くと、メルヴィルが1年前に使っていた。メルヴィルもなかなか妙な言葉遣いをする作家であり、もしかしたらこの二人のスタイルを比較するのは有意義な作業かもしれない (*Solomon* の *Dickens & Melville* は読んだのに中身は完全に忘れてしまった)。

だが、そんなことを考えるより前に、*dentistical* という字を眺めていた僕の頭に浮かんできたのは、映画『マラソンマン』であった (これを観た人なら誰でも、「ああ、あの場面のことね」とおっしゃるでしょう)。この映画の脚本はウィリアム・ゴールドマンが自分の小説をもとに執筆したものであり、その連想からゴールドマンの小説 *Boys and Girls Together* に *Miss Dickens* なる人物が出てくるのを思い出し、ふと、*Goldman* はどれだけ *Dickens* のことを知っていたのか気になった。いささか勉強にうんざりしていたことも手伝い、二人の名前をグーグルに入

れてみた。この無邪気な手すさびが如何に甚大な結果に至るか、余は神ならぬ身の知る由もなかったのであった。

ヒットした一つが Charles Nevin 著 *Lancashire, Where Women Die of Love* だった (Google Books)。ランカシャーの土地や人物にまつわることを書いた本で、ディケンズがプレストンを訪れた時のこと、ホートン・タワーがジョージ・シルヴァーマンの物語を触発したことなどが述べられている。そして、ディケンズの遠い親戚にあたるロバート・パーカーという人物がプレストンにおり、彼がアメリカに移住し、後に生まれた孫がロバート・リロイ・パーカーだ、と言う。このロバート・リロイ・パーカーこそ、誰あろう、ウィリアム・ゴールドマンが脚本を書きジョージ・ロイ・ヒルが監督した名作『明日に向かって撃て!』で、ポール・ニューマンが演じた強盗ブッチ・キャッシュディなのであった。

となると、ブッチ・キャッシュディはディケンズの親戚にあたる。いやはや、これにはびっくりした。ほんまかいな? この Nevin の記述をよく読むと、ロバート・パーカーが 1855 年にリヴァプールから船に乗ってアメリカにわたる時、ディケンズは彼を見送り、そのことを後に *Monthly Magazine* に書いている、とある。ちょっと待て。調べてみると、*Monthly Magazine* は 1843 年で廃刊になっているし、ディケンズが 1855 年にリヴァプールに行ったフシはない。どうもいんちきくさい話だ。

そこで、もうちょっと調査してみる。

<http://www.genesreunited.co.uk/boards/board/ancestors/thread/1344745>

はよくある家族史のサイトだが、ここのスレッドを見ると、昔『ウィキペディア』のブッチ・キャッシュディの項目にはディケンズとの関係についての説明があったと知れる (現在の項目はこの引用と異なっており、そのような記述はない)。

さらに深入りする。今度は、パーカー家の家系をその子孫がたどったサイトに行き当たった。

<http://eugenehalverson.blogspot.jp/2011/07/smith-parker-chidester.html>

かなり気合の入った調査をしたと見受けられるこのサイトによると、ディケンズはスコフィールドという一家を介してパーカー家と縁続きになっていた。アメリカに移住したロバート・パーカーはディケンズのサイン入りの『オリヴァー』と『コパフィールド』を所有していて、家族をディケンズ作品と聖書で育てたらしい。この伝統を継承して、彼の孫ブッチ・キャッシュディもまたディケンズを愛読し、この小説家が自分の親戚にあたることを自慢していたという。そして、1899 年にはニューヨークで、サンダンス・キッドと共に『クリスマス・キャロル』の芝居を観たらしい。ここにも 1855 年にディケンズがリヴァプールでパーカーの出港を見送ったとか、パーカーを含むモルモン教徒の船出のことをディケンズは

後に書いている、という記述がある。しかし、モルモン教徒についてのディケンズの記事は“Bound for the Great Salt Lake” (1863)で、これはロンドンから出港する船の話である。

というわけで、このサイトの情報もどれだけ頼りになるのか、怪しくなってきた。いろいろな伝記を調べてみても、パーカー家やスコフィールド家の話は出てこないで、家族史を研究しているディケンズに尋ねるしかない。そこで、そういう人を知らないか、と国際ディケンズ・フェロウシップ会長のトニー・ウィリアムズに問い合わせしてみた。彼もディケンズとブッチ・キャシディの話は初めて聞いたと驚いていた。そして、こういう問題は現在のディケンズ家の家長マーク・ディケンズが詳しいので訊いてみよう、ということになった。ワクワク。

すぐにマーク・ディケンズより返信あり——「確かにこの主張は聞いたことがある、しかし全く根拠のない話だ」。やっぱり。そりゃ、そうでしょうね。ただ、どこがどう根拠レスなのか、ということまでは説明してくれない。当方品性卑しき身ゆえ、もしかしたら、大ディケンズが盗賊と親戚だという瑕を隠蔽しようとしているのでは、などと邪推したくならないでもない。しかし、とりあえずは家長の発言を、あ、そうですかと聞いておこう。

最終的にはこういう結果だったんですが、大好きなポール・ニューマンがディケンズと関わりがあったなんていうのは、一瞬のこととはいえ、なんとも心地のよい、おもしろい夢でありました。